

1 はじめに

平城京は、中心を南北に貫く朱雀大路を境に東を「左京」、西を「右京」と呼び、東西を「条」、南北を「坊」と数える道路によって碁盤の目のように区画されています。京内には、貴族や役人の宅地や寺院が配置されていました。これまで、京奈和自動車道大和北道路建設事業に伴い、左京六条三坊から左京九条一坊にかけて発掘調査を行っています。そこでは、宅地を16分割する小規模な地割や、掘立柱建物が何度も建て替えられていることが明らかになってきました。

今回の調査地（20区）は、左京八条一坊十坪にあたり（図1）。九坪と十坪には「惣毫寺」の字名が残っています。2022年度に九坪（7区）で、2024年度に南隣の十坪（18区）でも調査を行っています（図2）。

2 発掘調査の成果

土壇状の高まりと、その周囲に遺構の分布が希薄な空閑地があり、さらにそれらを囲むように掘立柱建物などの奈良時代の遺構が集中するという、特徴的な空間構成であることが明らかになりました（図3）。主な遺構は次の通りです。

①土壇状の高まり 調査区南東隅で検出した高さ約0.3mの地山の高まりです（写真2・3）。西端で基盤層を切り下げた後、さらに盛土をして仕上げています。盛土の上面では、南北約15mの瓦敷遺構を検出しました。主軸は北で東へ約2度振れています。西側に平瓦を、東側に拳大の石を並べ、その間に瓦片を敷き詰めています。瓦敷遺構の東では、8間分（検出長約20m）の掘立柱列1を検出しました。その主軸は瓦敷遺構に平行しています。

②掘立柱列4・5 十坪の北辺沿いで検出した2条の東西方向の柱列です。北側の掘立柱列4は10間分（検出長約26.1m）、南側の掘立柱列5は9間分（同約24.6m）を検出しました。掘立柱列4と5は平行し、柱筋も揃うことから同時期の遺構と考えられます。柱掘方は一辺約1.1mの隅丸方形で、柱間寸法は約2.4m（8尺）です。

3 周辺の調査成果

①18区 20区と同様に、土壇状の地山の高まりと広い空閑地があり、その西側では土坑や掘立柱建物などの遺構が分布しています。調査区北西部の土坑からは、灯明皿を含む土師器の皿が200個体以上出土しました。土器と一緒に燃えさし等をまとめて廃棄した土坑とみられ、近辺で火を用いる行為が行われていたと考えられます（写真4）。

②7区 掘立柱建物22棟や土坑、井戸が調査区全体に密に分布する状況を確認しました。2棟の東西棟の掘立柱建物と、その間をつなぐ軒廊（渡り廊下）の可能性ある掘立柱列を検出しました。井戸などから墨書土器が多数出土し、「寺」・「仏」・「得」・「南」・「無」・「道」などと書かれていました（写真5）。

4 まとめ

土壇状の高まりは、調査区外へ広がっていくため詳細は不明ですが、今回はその西端の一部が見つかったものとみられます。西端で瓦敷遺構や掘立柱列1が見つかったことから、この高まりは何らかの施設の基底部であった可能性が考えられます。18区の高まりと一連の遺構とすれば、その南北長は約60mにおよびます。

7区では、特徴的な建物配置をもつ施設が確認されており、一般的な宅地ではないと考えられます。そして、建物群の主軸の振れが20区の瓦敷遺構と共通することなどから、九・十坪は一体的な土地利用がなされていた可能性があり、その特徴は次のようにまとめられます。

- 1) 18区・20区における土壇状高まりの存在と空閑地を伴う空間構成
- 2) 18区での灯明皿を含む土師器皿廃棄土坑
- 3) 7区での墨書土器「寺」や「仏」の出土
- 4) 字名が「惣毫寺」であること

加えて、全体で一定量の瓦が出土したことなどを総合的に判断すると、左京八条一坊九・十坪は奈良時代の寺院に関連する施設の可能性が高いと考えられます。



イワシン
奈良県立橿原考古学研究所
マスコットキャラクター

平城京左京八条一坊十坪

現地説明会資料

2025年7月27日（日）



写真1 調査区全景（南西から）



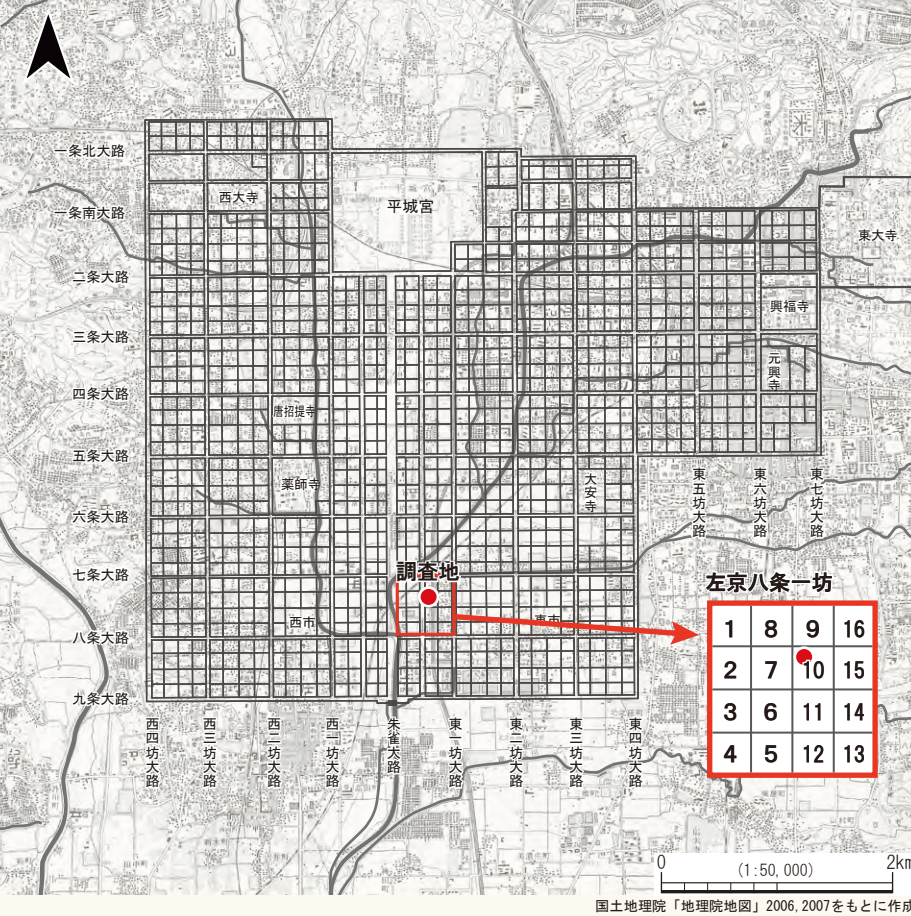


図1 平城京跡における調査地の位置

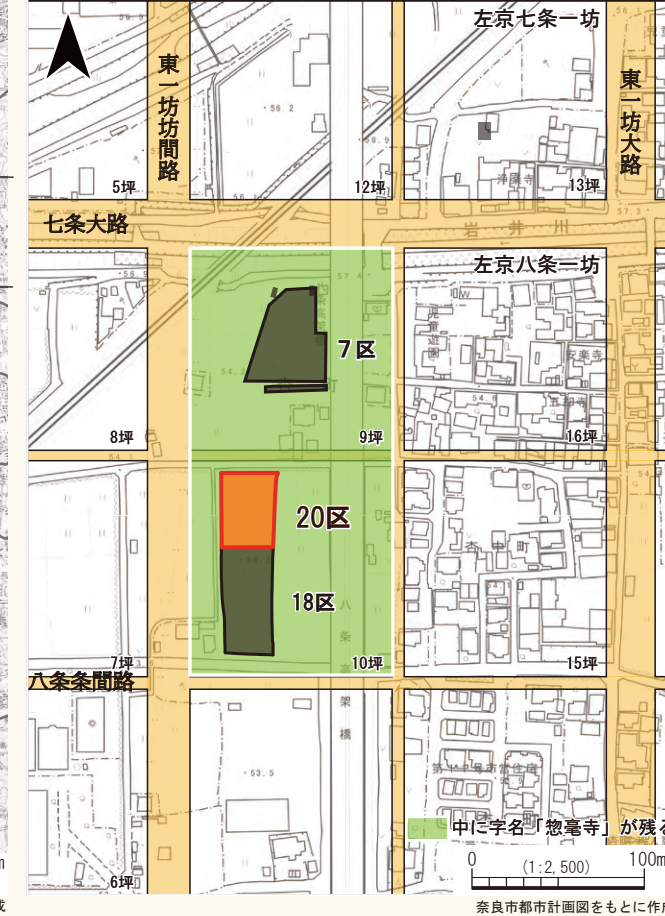


図2 左京八条一坊九・十坪の位置



写真2 土壇状の高まり
(南から)

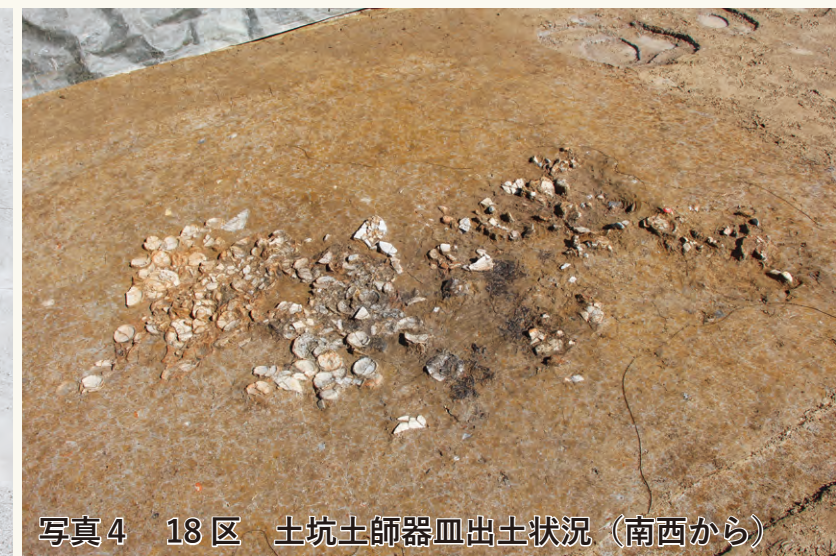


写真4 18区 土坑土師器皿出土状況 (南西から)



写真3 土壇状の高まり
(南西から)

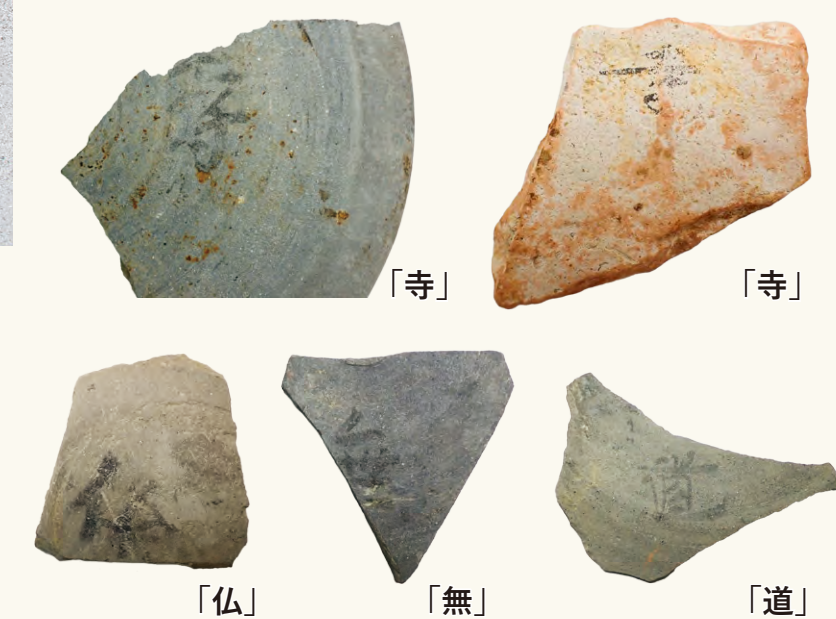


写真5 7区 墨書土器



図3 遺構配置図